

二〇二四年度

普連土学園中学校 入学試験問題

二〇二四年 二月四日実施

国語

四日午前四科

- 一、問題に答える時間は六十分です。
- 二、問題は、問題一 ～ 問題五 まであります。
- 三、答はすべて、「解答用紙」に記入しなさい。
- 四、「解答用紙」は中に二枚はさんであります。

問題一 次の文章を読み、後の問に答えなさい。

僕はいま、大学で*ジャーナリズムや*メディア・リテラシーを教えている。そのうちの一つの授業は大教室だ。学生の数も多い。たぶん300人以上いる。

教壇の上から一方的に授業を進めるだけでは面白くない。だから授業の最初の30分は学生たちにハンドマイクを手渡し、この一週間のあいだにメディアに対して自分が抱いた①違和感を、一人ずつ発表させることにしている。

この場合の違和感をもう少し詳しく説明すれば、メディア（テレビでも新聞でも本でもネットでも）に触れながら、この伝えかたは何か変だなとか腑に落ちないなどと思ったこと。これを毎週やる。いろいろな面白い意見が出る。

先週、テレビのバラエティ番組の公開収録に参加したのですが、オンエアを見たら雰囲気（ぶんぎ）がぜんぜん違うのでびっくりしました」

「どうして事件が起きると、被害者の評判は「挨拶をちゃんとする良い子でした」とか「とても真面目で残念です」ばかりになるのでしょうか。たまには「素行が悪いのでいつかはこんなことになるのではないかと思っていました」みたいなコメントがあってもいいと思うのですが」

「*24時間テレビって変です。寄付をするのならタレントも*ノーギャラでやるべきです」

「a 事件を起こした少年は顔写真や名前が出ないのに、被害者の側は少年でも名前や顔が出るのですか」
「犯人が捕まったときに手錠などにモザイクをつける理由がわかりません」

「半年くらい前に中国に旅行したとき、親から携帯に電話がかかってくるので、反日デモがすごいからすぐ帰ってきなさいと言われました。でも中国ではまったく反日デモなんて目にすることはありませんでした。会った中国人たちはみんな、日本人と知りながら、とても優しく接してくれました。これはいったいどういうことでしょうか」

学生たちはこんな疑問や違和感を口にする。僕が答えられる場合には答えるし、これはみんなで意見を出し合ったほうがいいなと思うときには論議させる。

本当なら、具体例を挙げた質問や違和感すべてへの答えを書きたいけれど、それではきりが無い。ここでは最後の質問

について、考えてみよう。

彼が中国に旅行していたとき、両親は家でテレビのニュースを見たらしい。鉢巻をして大勢で反日のシュプレヒコールをあげながら通りを歩く中国人たち。広場では日章旗に火をつける人もいた。確かにこんな映像を見たら、うちの子は大丈夫かしら、と思いたくなるだろう。

でも実際には、反日デモをやっている中国人はほんの一部だ。ところが日本のテレビ・ニュースを見ると、b中国全土で反日デモが吹き荒れているような気分になってしまう。

学生がこの違和感を口にしたとき、やっぱりその時期に中国にいたという別の学生も手を挙げた。彼はたまたま反日デモの現場に遭遇したという。

「通りを20人くらいの男たちが大声をあげながら行進していました。多くの中国人たちはその様子を歩道から眺めていました。バカなことをしていると顔をしかめている人もたくさんいました。たくさんの人が映像を撮っていました。日本のテレビ局の撮影クルーもいました。日本に帰ってきてから、YouTubeでそのときのニュース映像を見ることができました。でも雰囲気は、実際にその場にいた自分が感じた雰囲気とはまったく違います」

…… 中略 ……

日本のテレビ・ニュースの画面では、多くの男たちが怒っている。これだけを見れば、確かに中国全土で多くの人たちが怒っているかのような印象を受ける。

でもこのときに②映像をもっと広角で撮って周囲の様子を入れていたら、印象はまったく違うものになっていたはずだ。③これがフレーミング。映像は現実の一部を切り取ることしかできない。もちろん常に広角で撮っていれば、もっと周囲の状況はわかってくるけれど、今度は人の表情などの細かなニュアンスがわからなくなるし、何よりもインパクトが薄くなる。しかも最近はテレビのニュースだけではなく、よりアップで撮る携帯電話やスマホの映像を、ネットで見ることが普通になってきた。特に戦場や紛争地域など危険な場所ほど、携帯やスマホの映像の割合が大きくなる。つまりフレーミングがより狭くなっている。この流れはもう止められない。

ならば観る僕たちはどうすればいいか。

いま見ている映像は現実の一部でしかない。その思いを常に意識の底に置くことだ。僕は実はホラー映画が苦手だ。要するに臆病なのだ。だからホラー映画を見るときは、「これはフレームなのだ。全部じゃない。カメラが違う角度を撮れば、照明さんや音声さんや助監督などのスタッフたちが映り込むはずだ」と必死に自分に言い聞かせながら映像を見つめている（でもやつぱり怖いけれど）。

まあこれは極端な例。あまりそんなことばかり考えていたら映画を楽しめなくなる。でも映像（特に報道系）に接するとき、「これはフレームで切り取られた現実なのだ」との意識を常に持つことは、リテラシーとしては重要だ。

では次のステップ。撮った映像を編集するとき、音と映像を分けて編集することがある。難しい技術じゃない。テレビや映画の業界では、誰もが当たり前のように使う手法だ。そしてこの手法を使えば、④世界をいくらでもアレンジすることが出来る。場の雰囲気を変えることなど、とても簡単だ。

具体的な例を挙げよう。例えばあなたの学校の数学の授業の様子を、テレビ局が撮りにきたとする。

後日、その番組が放送される。学校の簡単な紹介が終わったあと、教壇で先生が黒板に連立方程式を板書しながら、一生懸命に喋っているカットが映る。

その先生のカットのあとに、カメラは先生の話の話を聞くあなたたちのカットに切り替わる。映像はあなたたちの顔だけど、先生の講義はずっと変わらない調子で続いている。

実はここで放送されたあなたたちの顔は、先生の講義がひと段落したあとに撮られた映像だ（これを業界では捨てカットとか雑景などという）。ところがカットが変わるときにも、先生の話は途切れたりはしない。なぜならこの場合、音は音だけでずっと切れ目を入れずに使っているからだ。この「音をベースにしながら映像だけを差し替える編集」をインサート（挿入）という。

このとき、あなたたちのどんな表情を使うかは、ディレクターや映像を編集する人の意図に任せられる。一生懸命にならずながら話を聞いている映像を使えば、とても熱心な先生と、真面目に授業を受ける生徒たちというシーンになる。でもあなたがたまたまあくびをかみ殺していたり、隣の席の誰かが一瞬だけ窓の外を眺めていたりするような映像を使えば、先生の熱心さが空回りしている授業というシーンになる。

- ① 先生が熱っぽく講義をしている。
- ② その講義の途中に、話を聞くあなたたちの顔が数秒だけインサートされる。
- ③ でもここで使われたあなたたちの顔は、実のところ講義が終わってから撮影されたカットだ。
- ④ 音声はずっと先生の講義が続いている。だから観る側は、インサートされたあなたたちの顔を、先生が講義しているときの表情だと解釈する。
- ⑤ そしてここで、あなたたちのどんな表情を使うかは、撮影して編集する側の裁量に任せられている。

インサートは編集技術の基礎だ。テレビ番組を注意して見れば、こんなシーンはいくらでもある。そしてそんな場合、場の雰囲気はどう再現するかは、ディレクターや編集する人の思いのままなのだ。c ディレクターが授業をとても有意義だと感じたなら、熱心にうなずきながら話を聞く生徒たちの顔をインサートするだろう。逆にこの授業はつまらないと感じたなら、あくびを噛み殺している生徒の顔をインサートするかもしれない。

インサートは一例だけど、映像はこうして作られるものだとすることを、まずあなたには知ってほしい。事実の断片を寄せ集めてはいるけれど、できあがった作品は事実とは微妙に違う。メディアが嘘つきであると言っているわけじゃない。もっと正確に言えば、⑤メディアは最初から嘘なのだ。だって授業中にテレビカメラが教室にあれば、誰だって緊張する。誰だって普段とは違う言動をする。自分を置き換えて考えてほしい。

明日はこの商店街にテレビが撮影に来る。もしもそんな情報が流れたら、商店街の人たちはどうするだろう。八百屋さんや魚屋さんや肉屋さんは、新鮮な素材をたっぷり仕入れるはずだ。本来は定休日の予定だったラーメン屋さんは、特別に店を開けるかもしれない。女性たちは美容院に行ったりして、精一杯おしゃれをするだろう。

そこで撮れる光景は、カメラが介在することで変質した光景だ。盗み撮りや監視カメラの映像は別にして、カメラはカメラによって変質した現実しか撮れないのだ。決して「ありのまま」ではない。つまりこれも、見方によっては「嘘」ということになる。

ついでに書くけれど、そもそも動画という言葉が嘘なんだよ。画は動いていない。フィルムなら一秒24コマ、ビデオな

ら一秒30コマの静止画が、パラパラ漫画の要領で動くだけ。つまり動画は目の錯覚。実はまったく動いていない。

とにかくこれらの嘘を集めて、記者やディレクターが現場で感じ取った真実を再構築する。それが報道だ。事実とは微妙に違う。でも記者やディレクターが現場で感じた真実だ。それは記者やディレクターによって違う。真実は人の数だけある。

だから最初から嘘なのだとしてすべてを決めつけてしまうのは、少しいかまったく違う。ほとんどの記者やディレクターは、そんな自分にとっての真実を現場で集めながら、真実を描こうと懸命に頑張っている。でも中には、頑張っていない人もいる。あるいは頑張る方向が、視聴率や部数などの数字を高くすることに向う人もいる。記者やディレクターが伝えようとする真実を、「客観性が足りない」とか「中立公正でない」などの理由で、つぶそうとするデスクやプロデューサーもいる。

第四章で僕は、0と1の例を挙げながら、メディアはわかりやすさを目指す書いた。つまり四捨五入。小数点以下の端数は、視聴者からわかりづらいとそっぽを向かれる可能性があるから、⑥ メディアはこの切り上げと切り下げを当たり前のようにやる。

この切り上げが、よく問題になるヤラセ。ある村に雨乞いの儀式がある。ロケ隊はそれを撮りに行ったのだけど、今年は雨が多かったからやらないという。でもそれじゃ困る。何をしに来たかわからない。だから村人に頼んで、雨乞いの儀式を特別にやってもらう。つまり再現してもらう。だから撮影された雨乞いの儀式は、どんな衣装を着るかとかどんな場所で行るかとか参加する村人は誰かなどの情報に加えて、ロケ隊に頼まれてやったということも重要な情報となる。これもそのまま提示すればよいと僕は思うのだけど、ほとんどの場合、頼んだ過程を省略してしまう。これは切り下げだ。

この切り上げと切り下げで、テレビ番組は作られる。番組だけじゃない。ドキュメンタリー映画などといわれるジャンルや、新聞や雑誌の記事なども、基本的には変わらない。

これは料理に似ている。仕入れてきたジャガイモやニンジンやたまねぎを、まるごと煮る人はまずいない。というか美味しくない。皮を剥かなくてはならない。切り分けなければならぬ。たまねぎのヘタやジャガイモの芽は除かないと。面取りをする人もいるだろう。豚肉もロースの固まりのままでは食べづらい。切って脂身を削っておこう。次に油で炒め

る。塩コショウも忘れずに。チャツネやウコンやコリアンダーなどの調味料を加えれば、より本格的な味になる。鍋に水を入れて湯を沸かし炒めた材料を入れる。浮いた油や灰汁はすくって取り除いたほうが美味しい。ここで市販のカレーを割り入れる。あらかじめ、たまねぎとカレー粉と小麦粉を炒めておいて、本格的なカレーを作る人もいる。

こうしてカレーができる。皿にご飯を盛ってカレーをかける。できあがったカレーライスを食べながら、ジャガイモやたまねぎの元の形がないと怒る人はいないだろう。確かに素材はジャガイモやたまねぎやニンジンだけど、そのままでは料理にならない。

もちろんニュースの場合は、できるだけ素材を切り刻んだり調味料を使ったりしないほうがいい。でもテレビの場合は時間が、そして新聞や雑誌の場合は文字数が、一定の量に限られている。素材をそのまま使っているのは皿からはみ出してしまふ。だから調理をしながら、いかに素材の味を引き出すかが問題になる。でも中には、素材の味などにあまり関心を持たずに、調味料ばかりを使う記者やディレクターがいる。確かに刺激的でとりあえずは美味しいかもしれないけれど、でも素材の本当の味はどこにもない。そこにあるのは、みんながジャガイモやニンジンらしいと思う味なのだ。

「森さんはヤラセをやったことはありますか？」と時おり訊ねられる。そんなとき僕は、その質問をした人が、どんな意味でヤラセという言葉を使ったのかを訊き返すようにしている。

事実にないことを捏造する。これがヤラセだ。その多くには、みんなから注目されるとか評判になるとかの見返りがある。ただしここまで読んでくれたなら、その判定は実は簡単ではないことは、あなたもわかってくれと思う。事実は確かにある。でもその事実をそのまま皿に載せても食べづらい。というか皿に載らない。だからみんなが喜んで食べてくれるように調理をする。切り刻む。余分だと思えば捨てる。⑦これが演出だ。

ヤラセと演出のあいだには、とても曖昧で微妙な領域がある。そんなに単純な問題じゃない。でも報道したりドキュメンタリーを撮ったりする側についてひとつだけ言えることは、自分が現場で感じとった真実は、絶対に曲げてはならないということだ。そして同時に、⑧この真実はあくまでも自分の真実なのだを意識することも大切だ。同じ現場にいたとしても、感じることは人によって違う。

つまり胸を張らないこと。負い目を持つこと。

メディアやジャーナリズムにおいては、これがとても重要だと僕は考える。自分は決して客観的な事実など伝えていない。自分が伝えられることは、結局のところは主観的な真実なのだ。そう自覚すること。そこから出発すること。だからこそ自分が現場で感じたことを安易に曲げたり変えたりすり替えたりしないこと。

(森 達也 『たったひとつの「真実」なんてない』 ちくまプリマー新書)

〈注〉 *ジャーナリズム……新聞・雑誌。放送などで、時事問題などの報道・解説・批評を行う活動。

*メディアリテラシー……報道などから自分に必要な情報を集めてそれを活用する能力

*24時間テレビ……「福祉・環境・災害復興」をテーマに、募金活動などの支援をテレビを通し全国に展開する番組。

*ノーギャラ……「ギャラ」は俳優や歌手などに支払われる出演料。「ノーギャラ」は出演料を受け取らない意味。

問一 空欄の a c に入れるのに最も適当な語をそれぞれ次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア もしも イ どうして ウ まるで エ こうして オ なぜなら

問二 ——線部①「違和感」とありますが、学生があげた違和感の例として、間違っているものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア ある番組の収録時の雰囲気と、実際の放送時の雰囲気が全然違っていった。

イ 事件が起こると、その被害者の評判は常に良く、加害者の評判は常に良くないものとして報道される。

ウ 事件の加害者のプライバシーは守られ、被害者のプライバシーは守られないことがある。

エ テレビで中国の反日デモばかり放送されていたとき、実際に中国でデモを目にすることがなかった。

オ 番組内で広く寄付を求めるなら、出演者は支払われるギャラは受け取るべきではない。

問三 ——線部②「映像をもっと広角で撮って周囲の様子を入れていたら、印象はまったく違うものになっていたはずだ」とありますが、広角で撮る時とアップで撮る時とで印象が違うと筆者が考えるのはなぜですか。答えなさい。

問四 ——線部③「これがフレーミング」とありますが、「フレーミング」された映像に接するとき私たちがどのようなべきだと筆者は説明していますか。「くようにすること」に続くように本文中から三十字以内で抜き出し、初めと終わりの五字をそれぞれ答えなさい。

問五 ——線部④「世界をいくらでもアレンジすることができる」とありますが、「世界」を「アレンジ」するとはどういうことですか。説明しなさい。

問六 ——線部⑤「メディアは最初から嘘なのだ」とありますが、メディアが報道することが「嘘だ」というのは、筆者のどのような考えを表していますか。その説明として適当な部分を本文中より四十字以内の一文で抜き出し、初めの五字を答えなさい。

問七 ——線部⑥「メディアはこの切り上げと切り下げを当たり前のようにやる」とありますが、報道における「切り上げ」の例としてどのようなことを筆者はあげていますか。文中から探して答えなさい。

問八 ——線部⑦「これが演出だ」とありますが、「演出」をするのはどうしてだと筆者は考えていますか。答えなさい。

問九 ——線部⑧「この真実はあくまでも自分の真実なのだ」と意識すること」とありますが、これは何を意識することですか。次のアくオから最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分が目にすることができる事柄が唯一の真実であると同時に、記者やディレクターはそのただ一つの真実を最後まで追究するべきだということ。

イ 記者やディレクターが現場で直接見たものは、現場で起きた正確な事実であると同時に、それがありのままの真実だと伝えること。

ウ 自分が現場で感じ取った真実は、客観的な事実であると同時に、ヤラセや演出を含まない真実となるよう、曲げずに伝えなければならないということ。

エ 記者やディレクターが現場で直接見たものは、自分が知ることができる唯一の真実であると同時に、現実はその全てではなく、違う見方も存在するということ。

オ 記者やディレクターの現場での見方を視聴者や読者に誠実に伝えることで、複雑な現実をわかりやすく伝えることができるということ。

問題二

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

夏休みの間、一人で佐渡の祖母宅で過ごすことになった小五の颯太は、煮え切らない性格の自分を変えようとして、佐渡の海を一キロ泳ぐ遠泳大会に挑戦することになった。祖母の教え子の夏生に水泳を習う一方で、昨年の遠泳の優勝者であるいとこの松木あおいが今年の遠泳大会への参加をかたくなに拒否していることを気にしていた。

体をひきずるようにしてようやく家にもどると、おばあちゃんはいなくて、あおいが台所のテーブルで勉強をしていた。「ただいまー」

あおいはぼくに気がついていないのか、算数のドリルやプリントを広げて下をむいたまま、答えを書きこんでいる。速いっ。

ぼくなんてまだときどき指を使っちゃうのにな。

それに、すごい集中力。

ちらつと顔をのぞきこむ。

プリントをにらむように見つめ、形のいい口をきゅつと結び、リズム良く鉛筆をはしらせている。

何かと似てる……。

……そうだ！

あおいが海を泳ぎきって浜に上がってきたとき。

あのときの表情とおんなじだ。

ときどき、うなずいたり、首をかしげたりしながら、解答欄をぐいぐいと埋めていく。

目に自信がみなぎっている。

あおい、楽しいんだ。

勉強、好きなんだ……。

あおいはいったん手を止めると、解答書を見ながら採点をはじめた。
シヤツシヤツと、速いテンポで丸をつけていく。

「よしっ」と小さくガツポーズをした後、あおいはふーっと息をはきだした。
ぼくも思わずふうっとう息をついた。

いつの間にか、息を止めていたみたいだ。

「① きやつ、びっくりしたー。帰ったの?」

「声かけたよ。きこえてなかったの?」

「ごめん……このプリント、やっと解けそうだったから。あ、おばあちゃん、民生委員の会議があるから、今日はわたしと夕ごはん食べてね、だつて」

「うん、きいてるよ」

あおいのプリントをちらっと見ると、わけのわからない計算や図形が細かい字でたくさん書いてある。

「へえ、六年になるとこんなむずかしい計算するの?」

「うん、受験用の問題って特殊だから」

考えられない。ただの学校の勉強だつてめんどうくさいのに。

セミがジジッと鳴いて、網戸にぶつかってきた。

「あおい、楽しそうだったね」

「えっ」

「なんか、ハルが真剣にゲームしているときみたいだったよ。あつ、ハルって東京の友達たちだけどさ……」
そういえば、あんなに気になっていたハルのこと、思いだしてなかったな。

あおいが大きな目をさらに見開いた。

「やばっ。② ゲームといっしょにするなっっておこられる!」

ぼくがそーっと目をそらそうとすると、あおいがくすつとわらった。

「……うん。楽しいよ」

「勉強が？ め、めんどくさくない？」

「うん。めんどくさい。けど、力をつけてるんだーって、実感できる」

はあ。③ やっぱりぼくのいとこなんて思えない。

ぼくなんて、夏休みの宿題のドリルすら、ちゃんとやってないのに。

「練習をつめば計算のスピードが速くなるのって、スポーツと似てるし。むずかしい問題の解き方がひらめくと、ゲームをクリアしたような感覚になるよ」

あおいの声はずんでいく。

「そういえば今日……健斗って子に会ったよ」

「あ……そう」

「あおいのこと気にしてたよ」

「しつこいよね」

「あおい、模試で新潟にいくから大会には出られない、つてみんなにいつてないの？」

「……いつとらんけど？」

「何もいわないから……ずっと心配してるんじゃない？」

④ 心配なんてしとらんっ」

あおいはシャーペンをカチカチカチ、と鳴らした。

「あ、ごめん……」

「もう、いいから」

あおいはテーブルに顔を近づけると、長い髪でぼくをシャツアウトした。

今、解いているドリルの上に、ノートが広げられている。

びっしりと数字で埋まっっていて、ところどころ赤字でポイントや気をつけることを書きこんでいるみたいだ。

本当に、すごい。

「あおい……ぼく……」

「なに？」

あおいが髪をかきあげる。

「ぼく、あおいが泳いでいる動画を見て、かつこいいなって思って、ぼくも泳いでみたいっていつちやっただけど……」

あおいが手を止めた。

「泳いでないあおいも、かつこいいと思う」

「えっ」

「勉強しているあおいも、同じくらいかつこいい……と思うよ」

あおいが顔を上げた。

顔が少し赤くなって、くちびるをかみしめている。

わわっ、ぼく、何いっちゃったんだろう。

「颯太、わたし……なりたいたいものがあるの」

あおいはウーンと両手を頭の上のぼすと、おじいちゃんのお仏壇の前にむかった。

「何？ 何になりたいの？」

ぼくもあおいについて、お仏壇の前に座った。

おじいちゃんが写真の中でわらっている。

「お医者さん……目指してみようかなって」

あおいが、おじいちゃんの写真を見つめていった。

「おじいちゃんが病気のとき、佐渡中央病院の先生がすごくいい先生だったの」

あおいがマツチをすって、ろうそくに火をつけ、お線香にともした。

窓の外から、カナカナカナ……と、ヒグラシの声がかきこえる。

「病気が見つかったとき、もう、やれることがあんまりなかったの、知つとるよね」

「うん……」

「でも、響子先生は……おじいちゃんも、おばあちゃんもなるべくつらくないようになって、たくさん、話をきいてくれた」

響子先生って、おじいちゃんの担当だった、お母さんくらいの年齢の先生だ。

お線香のにおいが、畳の部屋に広がる。

「おじいちゃんが亡くなったとき、すごく悲しかったのに、響子先生の顔を見たら、なぜか……ほっとして……」
あおいが言葉につまった。

「な、何か飲む？」

ぼくはあわてて冷蔵庫へむかった。

背中ごしに、あおいがつぶやいた。

⑤ それって、すごいなあって……思ってたんだ……」

「うん」

ぼくはふりむかずにうなずいた。

冷蔵庫の中に、もう麦茶はなかった。

かわりに炭酸飲料をコップについて、テーブルにもどったあおいに渡した。

「はい」

「ありがと……」

あおいがコップを受けると、プチプチと泡がはじけた。

しばらくふたりで、泡がのぼるのを見つめた。

ぼくは、はじめて海の中をのぞいたときのことを思い出した。

「ぼく、本当は二十五メートルしか泳げないんだ。しかも海の中にもぐったこともなかった」

「えっ……!!」

「だけど、今日は平泳ぎで五十メートルはいけたと思う。ぼくは、遠泳、がんばってみる」

あおいは炭酸に少し口をつけるとうなずいた。

「わたし……舞美^{まび}たちが……去年の大会の後に陰口^{かげぐち}いっとったの、きいてしまったんだ」

「な、なんて？」

「『あおい、先頭泳がせとけばラクだけど、なんでも余裕^{よゆう}って感じでウザイよね』……とか」

「うそっ……」

「もうそのときは、くやしくてくやしくて。でも、そんなことわすれようって勉強に打ちこんどったら、楽しくなって……。そして、わかったの。⑥ 本当にくやしかった理由が」

あおいが大会のときの写真を見つめた。

「わたし、遠泳に逃^にげてたんだと思う。本当は去年の夏休みからちゃんと受験勉強しようと思ってたのに、勇気が出なくて……。みんながリーダーやってっていうから、しかたないなっていいながら、本音はどこかホツとしてた。全部、中途半端^{ちゆうはん}だったんだよね……」

「も、もしそうだったとしても……陰口^{かげぐち}いうなんて、ひどいよ……!」

体がカッと熱くなったぼくに、あおいがさっぱりとほほえんだ。

「この夏は、もう楽な方に逃^にげないで、自分が本当にやりたいことにかけていたいんだ」

うわ……。やっぱあおいは強いなあ……。

ぼくがグラスについた水滴^{すいてき}をぬぐうと、あおいがぺこつと頭を下げた。

「颯太^{そうた}が大会に出たい、っていったとき、わたし、⑦ 本当はちよつとくやしくて、『むり』って強^{つよ}くいつてしまったんだ……ごめん」

「えっ、なんで？」

「目がキラキラしてて、気持ち、伝わってきたから。なんでハードルの高いことに、まっすぐにむかっていけるんだろう……」

……って」

「でも……でも、ぼくがその気になれたのは、あおいの泳ぎを見たからだよ」

あおいはぼくの言葉に小さく何度かうなずくと、グラスに口をつけた。
白くて細いのがこくり、と動いた。

ぼくも炭酸をぐくつと飲んだ。
泡が、のどの奥ではじけた。

翌日曜日、颯太は夏生との遠泳の練習にあおいを誘って出かけた。

そして、日曜日になった。

海岸にいくと、めずらしく夏生くんが先にきていて、沖をながめていた。

岩陰にシートをしくと、ぼくは思いきつてあおいにいった。

「今日……健斗くんたちもさそつたから」

「な、なんで!？」

「みんなにも、あおいの本当の気持ち、伝えた方がいいんじゃないかと思って……」

「いったって、どうせわからないよ。自分のことしか考えてないって思われるだけ」

「ぼくだって、『どうせ』ぼくには遠泳なんてむり……って、思ってたよ」

両手のこぶしをにぎりしめて、必死に声をしぼりだした。

「むりかどうか……やってみなくちゃ……わからないと、思う」

あおいがため息をつくとき、みんながやってきた。

健斗が軽い調子であおいに話しかける。

「よっ、松木。 a やる気になったか?」

あおいは、しばらく健斗を見たり目をふせたりした後、口を開いた。

「健斗……わたし、新潟の中学校、受験するんだ。でも、全然成績がとどかなくて……。大会の日は、新潟で模試を受けるから、本当に出るつもりはないの」

健斗は目を見開いて口をパクパクさせた。

「に、新潟の中学校?」

「うん。もし受かったら、新潟でひとり暮らししとるお兄ちゃんといっしょに住むつもり」
健斗は顔を **b** 曇らせると、せつぱつまったようにいった。

「みんな、練習しとつてもなんか去年とちがうんだ。タイムものびてねえし」

「去年……みんなと泳げて楽しかったけど、本当はわたし、遠泳に逃げてたところがあつた。去年の夏休みからちゃんと勉強しようと思つとつたのに、新潟で中学受験なんてできるのか不安で……。でも今年はもう、そんな中途半端はやめようと思つたんだ」

健斗は頭をガシガシかくと、あおいを見つめた。

「松木……なんで受験なんてするの？」

あおいはくちびるを結んで何度かまばたきすると、まっすぐ健斗を見た。

「わたし、お医者さんになりたいなつて思つとつたの。去年より前から……」

「い、医者……？」

健斗はうつむくと「マジかよ……医者……？」と **c** つぶやいた。

あおいが言葉をつまらせると、舞美が急に頭を下げた。

「あおい、ごめん！ 本当は、わたしのせいだよね……？ わたし、スイミングいっとするのに、あおいの方がずっと速くて、みんなに頼りにされて、くやしくて……あおいはなんでもできるのに、どうして水泳まで……つて、つい……」

「健斗も、松木、松木つてうるさいしね」

舞美が赤くなつて理奈の口をふさごうとした。

あおいはかすかにほほえんだ。

「舞美、理奈、あのときはショックだったけど……おかげでわたし、本当にやりたいこととむきあえたから。ちよつと目標は高いけど、がんばりたいんだ」

舞美が声をふるわせた。

「今年、あおいが練習にこなくなつて、ようやくわかつたんだ。あおいがひっぱってくれてたから、くやしけど……やる気が出てたんだつて。でも……あおいには別の目標ができたんだね」

「うん……。去年の舞美、だれよりも一生懸命泳いでたよね。わたし、本当はずつとかなわな……つて思ってた」
健斗が舞美に声をかけた。

「よっしゃ、それじゃあ、今年はおれたちがリーダーでがんばろうぜ！」

舞美は力強くうなずいた。

シートの上に荷物をおいて海にむかう途中、あおいがぼくのとなりでつぶやいた。

「颯太、ありがとう」

⑧ さつぱりした笑顔を見せて、あおいは波打ち際にかけていった。

(高田 由紀子 『青いスタートライン』 ポプラ社)

問一 空欄 a c に入れるのに最も適当な語をそれぞれ次のアから選び、記号で答えなさい。

ア ぼそぼそ イ すらすら ウ ひそひそ エ みるみる オ とうとう

問二 線部①「きゃっ、びっくりしたー。帰ったの？」とありますが、あおいが颯太が帰ってきていたことに気がつかなかったのはなぜですか。答えなさい。

問三 線部②「ゲームと一緒にするなっておこられる!？」とありますが、なぜ颯太はそう思ったのですか。説明しなさい。

問四 線部③「やっぱりぼくのいとこなんて思えない」とありますが、颯太はなぜそう思ったのですか。説明しなさい。

問五 線部④「心配なんてしとらんっ」とありますが、あおいがそうに思うようになったきっかけはどのようなことですか。次の文の空欄に当てはまる部分を本文中から抜き出して答えなさい。

友人達が こと。

問六 線部⑤「それって、すごいなあって……思ったんだ……」とありますが、あおいは具体的には誰のどのような姿勢が「すごい」と思ったのですか。説明しなさい。

問七 ——線部⑥「本当にくやしかった理由」とありますが、あおいは何に対してくやしさを感じていたことが分かったのですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 昨年の夏休みから受験勉強を始めないと間に合わないかとわかっていたのに、自分が皆と遠泳大会に出場することが楽しくて、受験勉強に身が入らなかつたこと。

イ 去年の夏休みは、受験勉強をしたかつたが、皆の期待にこたえて遠泳大会の時にリーダーを務めたのに、自分が大会後にウザイと陰で悪口を言われていたこと。

ウ 本当は去年の夏休みからちゃんと受験勉強をしようと思っていたのに、遠泳大会に出場することを言いわけに、自分が受験勉強に真剣に向き合っていなかつたこと。

エ 皆にすすめられその気になって遠泳大会でリーダーを務めたが、自分が実は受験勉強に取り組まなくて良い口実を手に入れることができず無邪気に喜んでしまったこと。

オ 皆で遠泳大会に出場して良い成績を収めたいのか、医者になるために新潟の中学校に進学したいのか、本当にやりたいことを見つけれずにいたこと。

問八 ——線部⑦「本当はちよつとくやしくて『むり』と強く言ってしまった」とありますが、あおいはなぜくやしかつたのですか。説明しなさい。

問九 ——線部⑧「さっぱりとした笑顔を見せて、あおいは波打ち際をかけていった」とありますが、この時のあおいの心情の説明として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 颯太のおかげで、皆に医者になりたいという目標を持っていることを伝えることができたことを感謝し、その過程でお互いのわだかまりも消え、目標に向かって気持ちよく進んでいくことができるようになった。

イ 今年の遠泳大会に出場しないのは、舞美に悪口を言われたからではなく、舞美が一生懸命に泳ぐ姿を見てとてもかなわないと思っていたからだと本人に伝えることができ、すっきりとした気分になった。

ウ 泳ぎが得意でない颯太の遠泳大会への意気込みに引つ張られるように、健斗たちも私もそれぞれの目標に向けて新たなスタートをきれるようになったことに内心ホッとした。

エ 遠泳大会へできることをためらっていた理由の一つであった舞美の陰口の本当の理由を知ることができたことで、舞美を許すことができ、自分の目標に向かって心置きなく進んでいきたいと思った。

オ 颯太が遠泳の練習に健斗たちを誘ってくれたおかげで、自分が本当にやりたいのは医者になるための受験勉強であることに気づき、一刻も早く勉強を始めたいと思った。

問題三

次の①～⑩の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

- ① 体育祭は雨天ジュンエンです。
- ② 自らポケツを掘る。
- ③ 会長になるのをコジする。
- ④ 両親にソムいて独立する。
- ⑤ 彼女はとても気がキク。
- ⑥ 彼は悪の権化のような人です。
- ⑦ 友達の前で体裁をとりつくろう。
- ⑧ メール若しくは電話で結果をお知らせします。
- ⑨ 上手くいっていても油断は禁物だ。
- ⑩ たとえ負けても本望だ。

問題四

次の①～⑩の「」に当てはまる最も適当な語を、後のア～シから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① 「 二つ 」
- ② 「 から駒こま 」
- ③ 「 を割ったような性格 」
- ④ まかぬ 「 は生えぬ 」
- ⑤ 「 食う虫も好きずき 」
- ⑥ 「 をする 」
- ⑦ 濡れ手ぬめで 「 」
- ⑧ 「 の大木 」
- ⑨ 「 栗三年柿八年くり かき 」
- ⑩ 「 を洗う 」

【語群】

- ア 葉は
- イ 梅うめ
- ウ 桃もも
- エ 竹たけ
- オ 芋いも
- カ 蓼たで
- キ ごま
- ク 栗あわ
- ケ 種
- コ うど
- サ 瓢箪ひょうたん
- シ 瓜うり

問題五

次の①～⑤の例文の——線部と、意味・用法が同じものをあとのア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① こんなことで涙を流してたまるか。

ア いつか外国に行ってみたいと思う。

イ この犬はどこから来たのだろうか。

ウ さあ、散歩にでも行こうか。

エ そんなことができるものか。

② 落ち葉と一緒にくつついてきた。

ア 母と温泉に行った。

イ 私の見解と姉の見解は異なる。

ウ 学園祭は中止だという。

エ 冬も半ばとなった。

③ 仕事をしながら大学に通う。

ア 昔ながらの街並みを散歩する。

イ 春の日ざしをあびながら、川は流れる。

ウ 下手ながら一生懸命にやります。

エ 行くと決めていながら、なぜ行かない。

④ 窓から山が見える。

ア 雨が降りそうだから体育祭は中止です。

イ 兄から本を借りる。

ウ 京都から夕方に出発した。

エ 今から百年も前の話です。

⑤ 暇があれば行こうと思う。

ア 川もあれば、海もある。

イ 彼女が来ればこの発表が成功したのだが。

ウ 一に一を足せば二になる。

エ バイオリンも奏でれば、歌もうたう。

(以下余白)